# 神様は全てを見ておられる

サムエル記下12章1～15節
2022年5月29日
松田 基子 師

私達が人生で、一番気を付けなければならないこと、心の目を覚ましていなければならない事は何でしょうか。 それは罪の誘惑です。 罪とは、神様との関係を切って、自己中心に生きる事です。 自己中心は如何にも、人間が自分の考えに立って、自立した生き方に見えますが、人間は神様との関係を切ったなら、それはサタンと結ばれているのです。 つまり、**自己中心**は、**サタンの奴隷になった**ということです。

サタンは悪魔と同じ意味です。 元の意味は、**中傷する者、訴える者**です。 人間を誘惑して、神様に反逆させ、罪を犯させるのですが、人間が罪を犯してしまいますと、クルリと向きを変えて、その罪を訴え、告発し続けるのです。 人類の祖は、サタンの誘惑に心引かれて、神様を疑い、神様の命令を破り、罪を犯してしまいました。人間の祖が、サタンの誘惑に負けて以来、誘惑に遭わなかった人は、一人もいません。 そして**誘惑に勝った人**は、人の子となられた**イエス様以外に、誰一人として居ません。 聖書には**人間の根本問題が**サタンの誘惑**にあり、人間はその誘惑に負け、その結果、罪に苦しみ、**サタンに縛られた**人生を歩んでいる、その**姿が記されて**います。 しかし、神様は、その様に、ご自身に叛いた人類を見捨てることなく、**救いの道を開き、招き続けて**おられるのです。

神様は、
『どんな**罪人も**、お**見捨て**になる事は**無い**』
というのが、**聖書のメッセージ**です。 神様は人間を罪に誘惑するサタンの存在について、最初から、警告を与えておられます。 人間の祖が、神様の警告を破って、罪を犯した結果、その子どもを表す、カインとアベルは、互いを尊び合うべき存在でありながら、兄カインは弟、アベルを、嫉妬して、誰も見ていない野原で、弟を殺しました。 カインは誰も見て居ないと思っていましたが、神様は全てを見ておられました。 そして、カインに、弟殺しの罪を問われました。 その時神様は、創世記4章7節で、
「**罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。 お前はそれを支配せねばならない**」
と言われました。 これは**神様の**全人類に対する**命令**です。

では、この罪に負けると、どうなるのでしょうか。呪われた人生を刈り取ることになり、カインは神様に、創世記4章13節で、
「**わたしの罪は重すぎて負いきれません**」
と叫んでいます。 神様はその様なカインを憐れみ、カインに一つの徴(しるし)を与えて、彼を守る約束をお与えになりました。
『人は皆、罪人であり、その意味から、カインの末裔(まつえい)』
と言われます。 人は誰も、罪の誘惑から逃れることも、罪を支配することもできません。 **聖書**は、人類の、その**罪の滅びから**の**救いの道を示す書物**です。

しかし、そこで大事なことは、
『神様は、救って下さるのだから、何をしたって良いのだ』
では、ありません。 神様は聖書の初めから、罪のもたらす苦しみの大きさを教え、罪を警戒する事を教えて下さっています。 なぜなら、神様だけが、罪の本当の恐ろしさをご存知だからです。人間は罪の本当の恐ろしさを知らないために、罪を軽んじています。 そのために、人間は後悔しても後悔仕切れない罪を犯し、苦しむのです。聖書はその姿を、ダビデを通して教えています。

ダビデは神様に愛され、選ばれた人物です。彼は、その愛に答えて、心から神様を愛し、敬い仕えました。 神様はその彼に、イスラエルの王位を与え、紀元前千年時代の人間の歩みに会わせて、周辺諸国との戦いに、勝利させて下さいました。 ダビデは頭では、全ては神様からの憐れみと助けによって、イスラエルの勝利があり、自分の王位が保たれている事を認めていましたが、
『立派な王宮、強力な軍隊を保持し、比類無き称賛の言葉が、自分に向けられ、人と言う人が皆、自分の一言で動き、自分の

思い通りにならないことは何も無い』
と思い始めた時、彼の、神様を仰いでいた
その目は、
『この世を見る目、自分を
楽しませるものを捜し求める目』
になってしまいました。

サムエル記下、11章1節の、ダビデはどうだったでしょうか。

**「年が改まり、王たちが出陣する時期になった。 ダビデは、ヨアブとその指揮下においた自分の家臣、そしてイスラエルの全軍を送り出した」**

**「彼らは、アンモン人を滅ぼし、ラバを包囲した。 しかしダビデ自身はエルサレムにとどまっていた」**

とあります。 パレスチナ地方、中近東の気候は、雨量が少なく、雨期と乾期がはっきりと分かれています。 雨期になりますと、集中豪雨の様になります。 ですから、道路はぬかるんで、戦車を動かすことが出来ません。 雨期にはそのために戦いを中断せざるを得ません。 年が改まると言うのは、雨期が終わり、春となり、一斉に若葉が萌えだす時期です。

王たちは春と共に、軍隊を整え、雨期の前に中断していた戦いを再開するのです。 イスラエルは雨期前に、アンモン人と戦っていました。 そもそも、戦いの始まりは、アンモンに新しい王が即位したことにより、亡き王に恩義を感じていたダビデは、家臣に表敬訪問をさせたのですが、先方は、
『偵察に来たと疑って、
ダビデの家来を辱めた』
ことから、戦いは始まりました。 アンモン人はイスラエルと戦うために、アラム人に援軍を求めました。 一方ダビデは、イスラエル軍を整え、アラム軍を撃退しました。 雨期に入り、肝心のアンモンとの戦いを残したまま、中断していました。年が改まり、乾期となり、いよいよアンモン人との決着を付ける時がやって来たのです。

この時ダビデは、王として、先頭に立って出陣すべきでした。 ところが彼は、アンモンの援軍であったアラム軍を撃退した事から、アンモン人だけなら、
『自分が先頭に立って行くまでもあるまい。
ヨアブに任せておけば、それで討ち負か
せるに違いない』
と高を括ったのです。 ダビデは先頭に立って出陣すべき、王の務めを放棄して、自分を甘やかしました。

ヨアブとイスラエル全軍は、全力を尽くしてアンモンと戦い、首都ラバを包囲しました。 一方王宮に残ったダビデは、のんきに昼寝をして、夕暮れに起き上がり、王宮の屋上に登り、涼風を求めました。 王宮は高台に建っていました。民家を見下ろす事が出来ました。 ダビデは戦場の兵士達の苦労を思いやる事も無く、屋上から見える景色に、ぼんやりとしていました。 すると一人の女性が、水浴をしている姿が目に入って来たのです。 ダビデはそこで、見ては成らぬと自分を制して、その場を立ち去る事が出来ませんでした。 ダビデが目を凝らして見ると、
『女性は大層美しかった』
のです。 神様はカインに、

**「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない」**

と命じられました。

つまり、誘惑に引かれないように、追い出さなければ成らないのです。 ところがダビデは、自分の欲情に負けて、人をやって女性の素性を調べさせました。 女性はヘト人ウリヤの妻でした。ウリヤはヘト人即ちヒッタイト人ですが、ダビデ軍の兵士となり、ヘブライ名のウリヤ（その意味は、主なる神は我が光）という名の持ち、主なる神様を信じ、ダビデに忠実な兵士でした。

ダビデは十戒に、
『姦淫しては成らない』
と命じられている事は、良くよく承知していました。しかし、彼は心の内で、
『それは、一般民衆への戒めであって、
自分は王位にあり、王には何でも許される。
ウリヤは幸い戦場にいる。 兵士は皆戦場に
出て行っているから、誰にも分からない』
と考えたのです。 そして、バト・シェバをこっそり、王宮に召し入れました。 当時女性の人権は軽

んじられ、一夫多妻も認められた時代でしたが、姦淫は厳しく禁じられていました。 神様は幸いな命の繁栄の為に、夫婦の秩序を堅く守る事をお命じになりました。 サタンの誘惑に従ったダビデは、更に大きな罪を犯しました。

罪とは、抱え込んでいる限り、それはどんどん大きくなって行くのです。 何くわぬ顔をしていたダビデのもとに、バト・シェバから使いが来て、

「子を宿しました」

との知らせが届きました。 ダビデはやっと事の重大さに気付きました。 神様に忠実な名君と讃えられ、慕われて来た自分が、自分に忠実な家臣を戦場に送りながら、その間に忠実な家臣の妻と姦淫した事が明らかになれば、ダビデの名は地に落ちてしまいます。 ダビデは何としてでも、自分の立場を守りたい一心で、ウリヤを戦場から呼び戻しました。 そして、ウリヤの労をいたわるかのように見せかけて、バト・シェバの許に帰そうと、飲ませ食べさせ、誘導しましたが、愚直な迄に忠臣なウリヤは、11章11節で、

「神の箱も、イスラエルもユダも仮り小屋に宿り、わたしの主人ヨアブも主君の家臣たちも、野営していますのに、わたしだけが家に帰って、飲み食いしたり、妻と床を共にしたりできるでしょうか。 あなたは確かに生きておられます。 わたしは、そのようなことはできません」

との言葉を貫き通しました。

車先生は、ダビデにとって、

『この2日間は、悔い改めるべき時であった』

と記しておられます。 罪は一刻も早く悔い改める事が、人間に出来る最善の方法です。 罪は悔い改めを伸ばせば伸ばすほど、大きく更に重い罪の実を結んで行くのです。 ダビデは悔い改めるどころか、自分の名誉のために、自分に忠誠を尽くす、忠臣ウリヤを、亡き者にする事を考え、司令官ヨアブに、

『ウリヤを激戦地に送り、命を落とさせる様にとの書状を書き、それを本人に持たせて戦場に送り帰しました。』

書状を受け取ったヨアブは、ダビデの罪を知りながら、ウリヤの忠心を知りながら、ヨアブもまた、自己保身のために、ダビデを正す事をせず、ダビデの指示に従い、罪を犯しました。 罪は罪を呼ぶのです。 ウリヤの喪が明けると、ダビデは何食わぬ顔で、バト・シェバを妻に迎えました。神様がこの様なダビデをお赦しになる筈がありません。

神様は預言者ナタンをダビデの許に遣わされました。 ナタンはダビデの王としての正義感に訴える話しを始めました。

『貧しくても愛情豊かな男性が、やっと得る事が出来た一匹の雌の子羊を家族同様、娘の様に大事に育てていました。 ところが或る日、金持ちで非常に多くの羊や牛を持っていた男がやってきました。 何と彼は自分の所に来た客に、自分の羊を御馳走する事を惜しんで、貧しい男性が、大事に育てている、たった一匹の羊を取り上げて客に振る舞った』

というのです。

それを聞いたダビデは、烈火の如く憤り、12章5節に、

「主は生きておられる。 そんなことをした男は死罪だ。 小羊の償いに4倍の価を払うべきだ。 そんな無慈悲なことをしたのだから」

と王としての裁きを降しました。 すると、ナタンは12章7節、9節、10節で、

「その男はあなただ。」

「なぜ主の言葉を侮り、わたしの意に背くことをしたのか。 あなたはヘト人ウリヤを剣にかけ、その妻を奪って自分の妻とした。 ウリヤをアンモン人の剣で殺したのはあなただ。 それゆえ、剣はとこしえにあなたの家から去らないであろう。 あなたがわたしを侮り、ヘト人ウリヤの妻を奪って自分の妻としたからだ」

と厳しく叱責しました。

問題はダビデが犯した罪の大きさもさることながら、9節にも、10節にも

「何故主の言葉を侮り」

「あなたがわたしを侮り」

と神様は、

『ダビデが神様を侮った』
つまり、
『軽く見た。 見くびった。』
傲慢さを問題にされました。 ダビデは神様の祝福になれてしまい、いつの間にか、
『自分は王なのだ。 何をしても良いのだ。』
と、その心が神様の前から、地上の目線に下がってしまっていました。 ナタンに叱責されて初めて、自分の罪深い真の姿に気付いたダビデでした。 ダビデは13節で、
「**わたしは主に罪を犯した**」
と悔い改めました。 彼のその悔い改めの心は、詩編51篇に、その心情が綴られています。ナタンはダビデに、12章13節で、
「**その主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる。 しかし、このようなことをして主を甚だしく軽んじたのだから、生まれてくるあなたの子は、必ず死ぬ**」
と言い渡しました。

罪の代価は、払われなければなりません。
自分の罪故に、罪無き子の命が取られるのです。
ダビデは良心の責めに、苦しまなければなりませんでした。 サタンは、人間の心の隙間に、特に信仰者の心の隙間に、誘惑の言葉を投げかけ、それが如何にも素晴らしい事であるかのように、また、これは人間として、当たり前の事だと言う風に、罪を感じさせないようにして誘惑して来ます。 しかし、罪を犯させたならば、その罪を告発し、罪の実を刈り取らせるのです。
ダビデが犯した罪の実は、多くの妻たちに依る、異母兄弟間のトラブル、殺害、わが子の謀反など、ダビデの晩年は、あの神様に全信頼し、神様のみを見上げて、生き生きと生きた青年時代とは違った、悩み多い晩年を送る事になります。

しかし、神様は、ダビデとの契約を守り、
ダビデの系譜から、神の御子を、メシアとして誕生させられるのです。 **ダビデだけではありません、人は皆同じ**です。 **罪の真の深刻さ**、それはその**存在そのもの**を、**永遠の滅び**まで**引きずり込んで**行く事です。 神様はその深刻さを知らない人類のために、罪の無い神の御子イエス・キリストを、人の世に生まれさせ、**全人類の罪**をその身に**負わせ**て、人類の罪を贖い、真の**罪の赦しをお与え下さいました**。 神様はそれ程までして、人類を愛されました。 私達は今、その救いに招かれています。 私達はこの御救いを軽く見てはなりません。

罪赦されるのだからと、神様を侮ってはなりません。 どんな罪もイエス様の十字架の血潮の故に、赦されますが、悔い改めたなら、**悔い改めに相応しい実**を**結んで**行かなければなりません。 神様は全てを御覧になっている事を忘れず、しかし、神様の愛の眼差しを見つめて、悔い改めつつ、神様の前に真実に生き抜いて行くことが出来るように、聖霊の導きと助けを求めつつ、この世の旅路を歩み抜いて行こうではありませんか。

お祈りをいたします。
憐れみ深い天の父なる神様

私達は御子イエス・キリストの御救いに入れられていながら、罪の誘惑に心を動かす弱い者です。 我等を試みに遭わせず、悪より救いだし給えと祈る日々です。

何時もイエス様の十字架の贖いに目を注ぎ、罪に打ち勝つ者とならせて下さい。 聖霊の、上よりの導きと、助けをお与え下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。